



2005(平成 17)年度 リカレント講座募集要項 (追加募集)

講座のテーマ	これからの学校を考える - 教育改革の動向と学校の課題 -			
講座責任者	人間科学部 児童教育学科教授 中村 奈良江			
講座の概要	<p>現在揺れ動いている学校について、まず教育改革の内外の動向について学習し、さらに、学校が直面する諸課題の解決策について検討する。これらを通じて、教育を支援することを目的とする。</p> <p>大きく次の3つに分けて行う</p> <p>I 教育改革と教育実践</p> <p>II 子ども理解と教師の指導</p> <p>III 学力問題と国際比較</p>			
開講期間・時間	各1時間30分程度 全講義は3日で終了する。			
受講対象者	教育に関わる人(近郊の幼稚園、小、中、高等学校の教員、非常勤の教員、事務、大学院生など)			
募集期間	6月27日(月)~7月20日(水) 定員になり次第締め切らせていただきます。			
主 催	西南学院大学	後 援	福岡県教育委員会 福岡市教育委員会	
定 員	50名	受講料	4,000円/1日 (3日間で10,000円)	
講座記号	月 日 (曜日)	講座番号	内 容	担当者
I	8月3日 (水)	1	教育改革の動向 中教審答申、教育特区、教育基本法改正をめぐる動きから	児童教育学科教授 吉岡 直子
		2	授業分析とカルテ - 個に即した教育の前提 -	児童教育学科教授 田代 裕一
		3	実践者自身のスキルアップのための授業研究(改造)法	児童教育学科助教授 渡邊 均
II	8月4日 (木)	4	子ども理解と共感	児童教育学科教授 中村 奈良江
		5	幼児・児童の理解と教師の指導	児童教育学科助教授 門田 理世
		6	思春期の子ども理解と教師に求められるもの	西南学院大学 非常勤講師 大出 美知子
III	8月5日 (金)	7	世界における学力問題	児童教育学科教授 松永 裕二
		8	文科系教科の教育における学力問題	児童教育学科教授 藤田 尚充
		9	理科系学科の教育における学力問題	児童教育学科教授 大濱 順彦
計(全 9 回)				
備 考				
会 場：大学院棟教室を予定。				
講座の初日に開講式(オリエンテーションを含む)を行い、最終日に修了式及び茶話会を行う。				

日程	講義	講義内容の概略
8月3日	1 教育改革の動向 中教審答申、教育特区、教育基本法改正をめぐる動きから	日本の教育制度はかつてない大変動のただ中にある。それは学校制度、教育課程、教育行財政を始め教育のほとんどすべての領域を網羅して進行している。本講座では、中教審における審議、教育基本法改正問題、教育特区等の動きを概観し、特に学校制度と学校運営における改革の現段階（義務教育制度、学校選択制、地域運営学校等）に焦点を当て、その問題点と課題を考察する。
	2 授業分析とカルテ - 個に即した教育の前提 -	教育実践の第一の前提は、目の前の子どもの具体的な理解にあるといえる。この具体的な理解の上で、その子どもに対して何が可能か、何を実現できるかという、具体的な教育の構想が持てるのである。ここでは、そのような子ども理解の方法として、上田薫氏の創設した「カルテ」と、重松鷹泰氏が開発した「授業分析」を紹介し、事例を取り上げて、演習的に進めていきたい。
	3 実践者自身のスキルアップのための授業研究(改造)法	日々の実践の営みの中で授業改造を推し進めていくことは教師の重要な努めである。より良い授業を求めて「授業改造」を図る方法には多様なものが考えられるが、このプログラムでは、広く知られている例を挙げると「ウェビング」のような、教科等の内容に関わらず「アクティビティ」として導入することで学習者の思考を拡張するツールを共有したい。Bellanca, J の <i>Active Learning Handbook</i> (1997)を紹介しながら、学習活動を導く者としての「ひきだし」を増やす機会を提供したいと考える。
8月4日	4 子ども理解と共感	子どもの思考や社会性の発達の基本的な考えについて、認知論者や社会学習論者の知見を紹介し、子どもの思考は大人とはどのように違うかものであるか、それぞれの発達時期に子どもたちは何を獲得しようとしているかという認識を深める。また、発達と教育の関連についての考えを合わせて紹介することによって、II 限目、III 限目の理論的な背景を知ることを最大の目的としている。
	5 幼児・児童の理解と教師の指導	「子どもの仕事はあそびである」一見不可解にも取れるこの一文は、しかし、就学前・就学前期の子どもの携わる者にとっては、生涯をかけての命題として提示される。子どもの育ちを把握し、その発達を助長するためには、「子どもの学び」という切り口から、この命題の真偽が問われ続けなければならない。本講座では、具体的な事例を取り上げながら、正しい子ども理解に立脚して「子どもの学び」を語れる教師とその指導の在り方について考えていく。
	6 思春期の子ども理解と教師に求められるもの	思春期は対応が難しい時期である。ここでは、思春期についての基本的な理解と同時に子ども達の声を載せた資料等を読みながら、かれらの内面の世界に触れていく。また、スクールカウンセラーの視点からみた思春期の子どもたちの現状と、教師としてどのような対応が可能であるかを考えていく。あわせて、不登校等についてもとり上げ、事例を通して考えていきたい。
8月5日	7 世界における学力問題	国際的な学力調査によってわが国の子どもたちの学力低下傾向が明らかになり、「ゆとり教育」の見直し気運が高まっている。しかし、「学力」とはそもそも何なのだろうか。世界の国々においても学力問題への関心は高く、例えば EU 加盟国は、この問題にキー・コンピテンシー (Key competencies) 「個人が自立し、生き甲斐と責任があり、成功した人生を送るために不可欠なもの」という概念でもってアプローチしている。このような諸外国の動向を比較検討しながら、本講義では世界における学力問題について考えてみたい。
	8 文科系教科の教育における学力問題	IEA(国際教育到達度評価学会)、PISA(生徒の学習到達度調査)の国際的学力調査で日本の子どもの学力低下が指摘され、ゆとり教育から学力向上と競争の教育へと急速に転換されようとしている。4 月には「発展的な内容」を盛り込んだ中学校教科書の検定結果が報告されたが、社会科では「発展的な内容」は殆ど認められず、特に歴史では 1 項目もなくゼロだった。文部科学省の言う「学力」とは何なのだろうか。国語と社会科を中心に、IEA や PISA の結果、教科書、そして授業実践から学力について考えたい。
	9 理科系学科の教育における学力問題	昨年12月に発表された2つの国際的な調査(OECDの国際学習到達度調査、及び国際教育到達度評価学会の学力調査)結果より、日本の小中学生の応用力、読解力や理数学力の低下が判明した。これらの学力低下の原因はどこにあるのか、この学力低下を解決するための理科教育には何が必要か。特に理科の学力低下の原因と解決方策について提起する。また、小学校の理科教育における指導書である、「小学校学習指導要領解説・理科編」の問題点にも触れる。